

自分がぼけていたか

僕が乗ろうとバスの中を見ると、車中は、お客さんが誰もいない。すいてガラガラとはこの事だ。

僕は、一番後ろのシートの真ん中に体を横づけにした。

一番楽な姿勢で、ゆったりと本を読む。バスは僕を一人乗せて、一路、三条京阪へ。すごい貸切りバスだ。

おばとこに寄った。

「ああ、疲れた」と座ると、すぐ、母がおばに頼んであったお米を二升、おばが、僕に渡した。

京都駅に近い為か、ヤミ米が安い。

昔は、僕が小さい頃、よく、東海道線の蒸気機関車を見に行った。

東海道線の東山トンネルから列車が出てくるのを、線路沿いに人がいっぱい待っていて、走る列車から投げ下ろされる

ヤミ米の大きな白い袋をガツガツ、あらそう様に、皆がひろっていた。

僕は、何してるのか、わからないまま、いつも、鼻たれながら、ぼかーんを見ていた。